福田徳三研究会（2008年7月31日、一橋大学）

上田貞次郎の見た夢

上村 泰裕
名古屋大学大学院環境学研究科（社会学）
kamimura@lit.nagoya-u.ac.jp

上田貞次郎（1879～1940）

0. はじめに

- 「慶応三年に神田孝平がイギリスのウィリアム・イリスの経済書をオランダ語の重訳から邦訳して『経済小学』と題して出版してから、日本経済学界は次第に隆盛となった。明治、大正、昭和にわたり多数の優れた経済学者が輩出した。しかし、独創的であり、日本的であり、翻訳臭味のすくない経済学者は多くない。その第一人者を私は上田貞次郎博士であると信じている。」(猪谷善一)

猪谷善一と貞次郎（1924年）

1．学者三代
―実学の系譜―

- 父・上田章（1833～1881、儒学者）
  ――紀州藩の改革参謀

- 次男・上田良二（1911～1997、物理学者）
  ――ナノテクの先駆者

父・上田章の碑（青山墓地）

上田章の師・松崎慊堂（1771～1844）

父・上田章
―紀州藩の改革参謀―

- 「文久辛酉二年、先生年二十九、擢んでられて明教館寮長となる。人となり敦厚にして気節あり。人と接するに備わらんことを求めず、好んで後進を奨励す。その諸生を訓督するや、章句末節をもって責めず、もっぱら元気を振起し、国脉を維持することをもって務めとなす。ここにおいて青年有為の材、続々乎として輩出す。」(墓誌)

上田章の教え子たち

- 岡本柳之助（1852-1912。陸軍少佐。竹橋事件の黒幕と目され官位を剥奪された後、閔妃暗殺を首謀）
- 岡崎邦輔（1853-1936。政友会の領袖、衆議院議員当選10回。陸奥宗光の従弟）
- 小泉信吉（1853-1894。慶応義塾に学ぶ。横浜正金銀行初代副頭取、大蔵省主税官、慶応義塾長などを務める。小泉信三の父）
- 中井芳楠（1853-1903。慶応義塾に学ぶ。横浜正金銀行初代ロンドン支店長を務め、日清戦争の賠償金送金や公債募集に尽力）

父の門下生・津田三郎（？～1891）

父・上田章
―紀州藩の改革参謀―

- 「海軍中佐津田三郎氏は、かつて亡父の門にありし人。頃日余に語りていわく、子が厳父は元気満々たりし人、その紀州藩に仕えて教育の事に従うや、廉恥節義をもって門生を率い、和歌山にて為政の官に昇りては、さかんに西洋の兵法を講ぜしめてついに歩騎砲の聯隊を編成せしむ。もって紀州藩青壮者の気風を一変せしめたり。」(『上田貞次郎日記』)

父・上田章
―紀州藩の改革参謀―

- 明治2年の藩政改革で設けられた歩兵隊、砲兵隊、騎兵隊、工兵隊の隊長9名のうち、上田章の門下生と思われるのは岡本柳之助を含めて6名。

- 「〔岡本〕柳之助はこの時〔1883年〕、金玉均を交えて、後藤象二郎・陸奥宗光・福沢諭吉や松尾三代太郎〔貞次郎の伯父。1847～1912。竹橋事件で陸軍大尉を免官となる〕らと相談し、朝鮮の国政改革に対する秘策を議している」(名草杜夫『右翼浪人登場――岡本柳之助の光と影』)

父の門下生・岡本柳之助（1852～1912）

十三日雨入修譜室晴退岡千仞来夜長井氏来
十四日晴當直
十五日晴訪三浦香澗 岡本柳之助中村正良来訪
両草野及松尾氏 渋谷在寛来従和歌山夜岩鄕
六草野兄弟及渋谷来
十六日晴与渋谷長井鵜沢赴池上拝貞洲夫人墓
帰路甚敷津晴帰 鎌田栄吉谷井保来出酌於
賣茶亭
十七日雨當直 息石舎會
十八日陰午退内人拉貞児拝八幡宮帰路入草野氏
敬児俱行 冢山五一郎来武内半父来榊造来 午後赴
築地同縣會
堀場 片岡 菅野退藏 菅野惇 菅野正業
森下 森嶋 小杉 鎌田 谷井 岡本柳之助
小泉 吉田 草鄕 吉川 岩橋 相川 小泉芳
十九日陰雨入修譜室晩渋谷氏飲
廿日晴當直 安井須磨之訃至 草野内人来
廿一日晴入修譜室午退内人拉敬児如芝衝 可孝来
廿二日雨入修譜室晴訪草野氏 津田四郎来
廿三日晴當直 津田四郎復来

上田章日記「内人拉貞児拝八幡宮」（1879年5月18日）

閑拓使登愛宕山稲葉通久来云明日上途帰
縣告別而去　夜訪草野氏座有可孝氏
七日晴南龍公祭日文武官員拝参者三百人
八日雨昨夜當直午退訪韋齋先生　三宅幹吉来
招長井氏接之
九日微陰　午後從公子如觀工場
夜上館　内人有尼疾可孝内人来省可孝亦来
十日晴當直公密謀世子墓参之事
十一日晴訪勝安芳謀昨日之事也午後上館
十二日晴訪三浦香澗亦言昨日之事也

訪有本応席
遂如芝街購
大日本史一部
如赤坂訪姉氏
贈金三円

十三日晴當直
十四日晴從公如橋場邸饗有本應席也三浦安
田中傳来接伴夜散
十五日晴上館公賞附属者之勤労徧賜金有差予
亦有賜午後訪草野氏
十六日陰午後雨當直
十七日晴午退晡息写舍小集夜拉故児如芝街
十八日晴上館作太真公写真記　小浦内人来　井上内
人来　岡千仞誘鹿児嶋人寺田弘来請群書治要
十九日陰午雨當直　貞児誕辰醍赤飯饗諸児

上田章日記「貞児誕辰」（1880年3月19日）

次男・上田良二（1911～1997）

次男・上田良二
―ナノテクの先駆者―

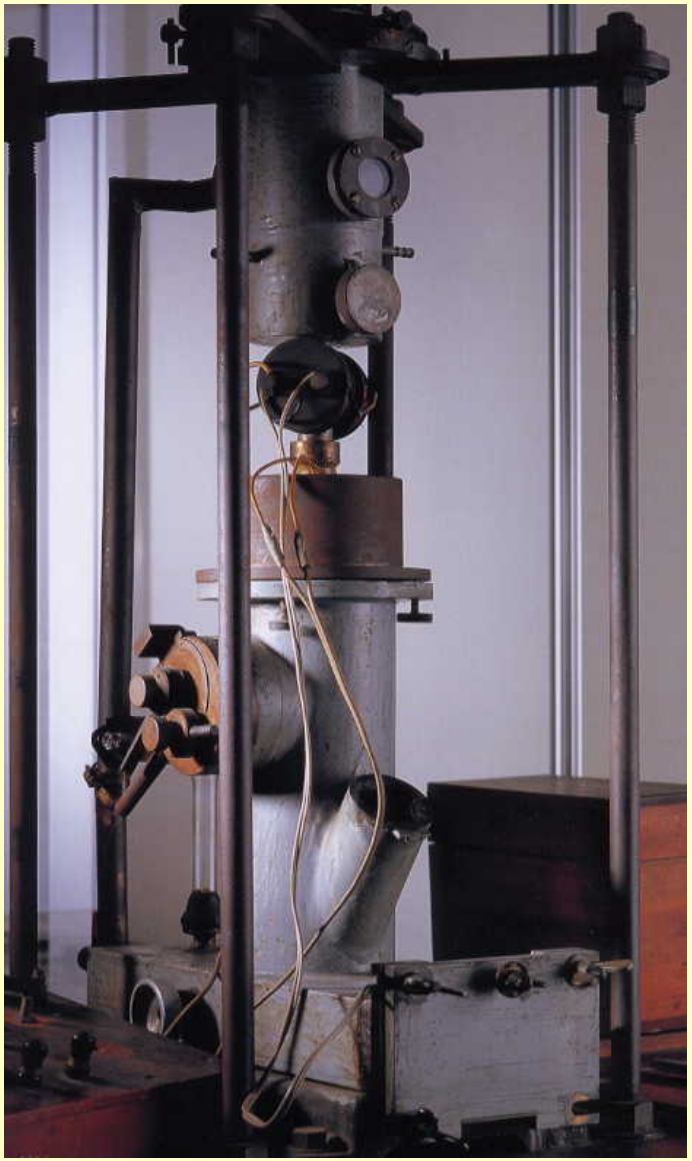
- 「私は自分を全く不肖の息子だと思っている。中学時代に歴史で落第点をとり、父から《歴史は面白いはずだ》と言われたことがある。戦後になってそれを思い出し、『英国産業革命史論』を読んでみた。《なるほど面白い》と思ったが、父の本を読んだのはそれ一冊だけだ。」(上田良二)

1912年の上田貞次郎家（てい、良二、正一、貞次郎）

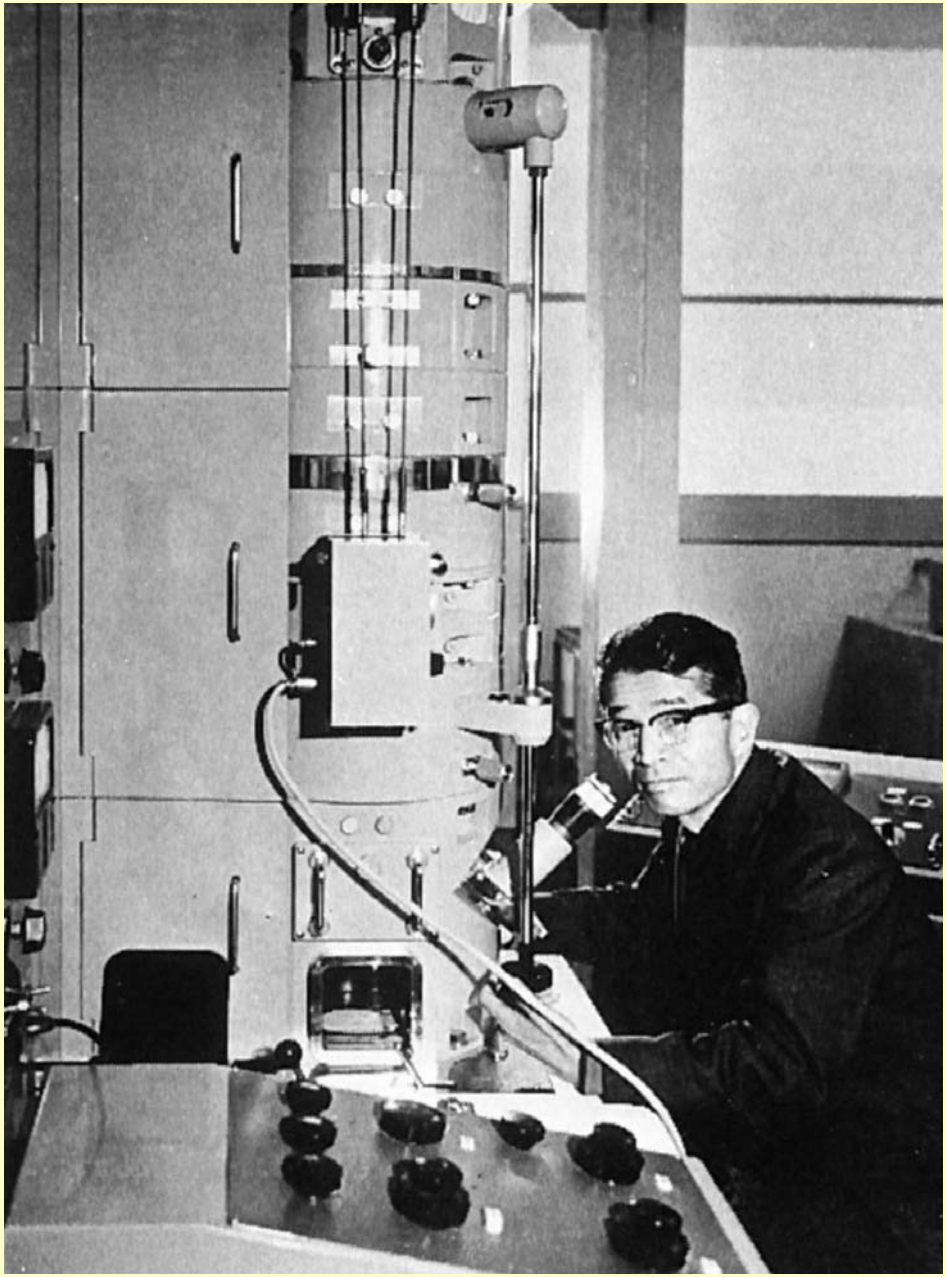
1922年の上田貞次郎家（信三、てい、勇五、良二、正一）

次男・上田良二
―ナノテクの先駆者―

- 「良二は正一よりも観察力、推理力においてまさり、学校の理科の教師はほめているそうだ。また彼は機械などに趣味を有している。しかし実行力においては正一に及ばない。彼は温良で如才ないが勇気には乏しい。まず工科でもやらしたらと思う。」
（『上田貞次郎日記』1922年、良二11歳）



上田良二が設計した電子回折装置（名古屋大学博物館蔵）



名大50万ボルト電子顕微鏡を操作する上田良二（1965年）

２．人と思想
―ケンブリッジの夢―

- 保守主義の遺産――紀州藩の人々
- 自由主義の息吹――福沢諭吉と元良勇次郎
- 社会主義との邂逅――ウェッブ夫妻

３. 人と思想
―ケンブリッジの夢―

- 「世界の歴史上忘るべからざる一九一四年の秋、僕が英国ケンブリッヂにいたときのことである。ある晴れた日の午後、はらはらと散るライムの落葉をながめながら、パイプ煙草をふかしている間に、ついうとうととねむってしまった。そのときの夢物語を綴ってみたのがこの書物である。夢のうちに会った人が三人ある。…」
(「Dialogue―ケンブリッヂの夢」1915年)

保守主義の遺産
―紀州藩の人々―

- 尊敬と違和:　三浦安（父の同僚、東京府知事）、岡本柳之助（父の門下生、朝鮮浪人）。

- 徳川家との関係:　嗣子・徳川頼貞の教育顧問。1931年、徳川家顧問を辞任。

幼年時代

兄・敬太郎とともに

少年時代（1887年＝8歳）

父の友人・三浦安（1829～1910）

古山巍（保守主義者）

- 「どうしてここへ来たかわからないが、七十近くの老人。さすが昔の武士教育に鍛えられただけあって、体格の頑丈な、広額隆鼻でしかも両頬に流るるごとき雪白の長髭をなびかせている。風骨高邁の国士。古山巍というて亡父の旧友だから僕はよく知っている。彼はもと明治政府の大官であったが、よほど前に退官して貴族院議員に勅選されている。」

古山巍（保守主義者）

- 古山　「世間では明治政府を藩閥とか、官僚とかいって攻撃するけれども、明治初年の官吏は少なくともみな国家の重きをもって自ら任じていた。その政治をいま成金や百姓議員らに任すのはじつに心細いことである。このありさまで進めば、大和魂も武士道もすたれてただ金の世の中、腕の世の中になり、天下の蒼生その堵に安んぜず、ということになりはしないか。」

古山巍（保守主義者）

- 古山　「いまの世界は文明とかいっても、国際問題になれば義理も人情もないのだから、このうちに立って日本帝国の勢力を強め、いわゆる国威国光を発展せしめんと思えば、どうしても一死国に報いんとする国士が出て、国民を導かなけりゃいかぬと思う。」

自由主義の息吹
―福沢諭吉と元良勇次郎―

- **“I read Mr. Fukuzawa’s *Fukuo-Hyakuwa* on the Jiji Shinpo.”**
  （『上田貞次郎日記』1896年、17歳）

- **Yujiro Motora, *Exchange: Considered as the Principle of Social Life***
  （ジョンズホプキンズ大学博士論文、1888年）

父の門下生・小泉信吉（1853～1894）

福沢諭吉（1834～1901）

正則予備校教諭・元良勇次郎（1858～1912）

中川成吉（自由主義者）

- 「次は僕の同窓の先輩で実業界にその名を知られた中川成吉。二十貫もありそうな大男で、顔に光沢のある元気満々たる人物。学校にいるときには、ミルの経済学を三度くりかえし精読したので有名になった。大の個人主義者だが、いまでは実際の経験によってすこぶる穏健な説を立てる。」

中川成吉（自由主義者）

- 中川　「自由競争は、古山様にいわせれば「金の世の中、腕の世の中」かもしれないが、私はさほど残酷なものとは思わない。かえって大体公平に、智者と愚者とをふるいにかける適当の方法である。」

中川成吉（自由主義者）

- 中川　「自由主義の社会においては、各人みな自分の意思によって活動するのだから、自然に責任を感じて独立自尊の人になる。」

中川成吉（自由主義者）

- 中川　「政府の保護干渉をやめて、個人の自由を許し、そのオリヂナリチーとイニシャチーブを発揮させなければならぬ。」

社会主義との邂逅
―ウェッブ夫妻―

- 「一週二度ずつ、シドニー・ウェッブという人の講義を聴きに行く。この人は有名な社会主義者だ。英国ではソシアリストというたところが、少しも乱暴とか革命的とかいう意味はない。ただ私有財産をだんだんに少なくして公有財産に移し、富者の所得の一部分を租税として取って貧者のために用いようというだけのことだ。」

- 「シドニー・ウェッブの奥さんはやはり学者だ。本も夫婦で共著にする。講義も交代にやる。」
（妻てい宛の書簡、1913年11月23日付）

Sydney (1859-1947) & Beatrice Webb (1858-1943)

新島進一（社会主義者）

- 「いままでドイツに留学していたが、こんど学位を得て帰朝しようという瀟洒たる青年紳士。これは僕が子供の時から知っている某県豪農の子でその名を新島進一という。洋行前には熱烈な帝国主義者であったが、近ごろは変わって社会主義に興味を有している。」

新島進一（社会主義者）

- 新島　「現在の財産制度というものを変更しないでたんに自由競争を許しただけでは、万民平等の理想が行なわれないばかりでなく、かえって不平等になります。」

新島進一（社会主義者）

- **新島**　「社会主義者は、大名や士族の特権を廃止して四民平等の主義を打ち立てるのみならず、土地や資本を公有にしてこれを人民全体の利益のために用いよう、と主張します。」

新島進一（社会主義者）

- 新島　「月給は地位の高下にかかわらず、平等に当人の必要だけを渡します。たとえば子供の多い人には少ない人よりも多くくばり、病気や、出産や、死亡のときは平生よりも多くくばります。」

福田徳三との特異な師弟関係

- 「何というても福田徳三氏は余の恩師なり。余は氏に接するごとに、思想の博大高遠にして、かつ精神の活動の活溌なるに感服し、身をつり上げらるる心地す。ただ氏の人物の偏屈狭小なるは疑うべからず。…しかし大体についていえば、氏は狷狭不介にして、利害を度外視し、情の行くところに任ずる人なり。高尚なる人格にあらざれども、また決して下劣にもあらず。調子はずれの奇人なり。この奇人たる性質は氏の生涯を不幸にする基なれども、また奇人なるがゆえに奇抜なる説を出しうるなり。奇行奇説はすなわち氏の本領にして、充分に本領を発揮するの外なし。」(『上田貞次郎日記』1904年)

師・福田徳三（1874～1930）

３．研究の軌跡
―日本経済の歩みとともに―

- 『外国貿易原論』（24歳、1903年）
- 『株式会社経済論』（34歳、1913年）
- 『英国産業革命史論』（44歳、1923年）
- 『新自由主義』（48歳、1927年）
- 『日本人口政策』（58歳、1937年）

『外国貿易原論』
自由通商の論拠（24歳、1903年）

- 「考証該博、しかして紛糾せる学理を寸糸乱れず、明快流暢に論断し去りてほとんど遺憾なし。著者の造詣の深きは、その学理的思索の鋭きと相まってこの一篇をなす。独り卒業論文中の白眉たるのみならず、また我邦幾百の経済論中まれに見る所。」（福田徳三）

『外国貿易原論』
自由通商の論拠（24歳、1903年）

- 「第一）保護の目的は保護を受くる工業をして後年完全に成立せしむるにあれば、この完全なる成立が永久の障害によりて妨げらるる工業に対しては、始めより保護の方針を取らざるを可とす。」

- 「第二）保護の目的は自立すること能わざるものを興起せしむるにあれば、すでに自立の力を具えたるものにこれを施すべからず。」

『外国貿易原論』
自由通商の論拠（24歳、1903年）

- 「しかれども、貿易政策の原則は、あくまでも膨張的自由貿易主義たることを要す。輓近、世界の大勢を云々してわが国に保護策を擬するがごときは、断じて非なり。」

『株式会社経済論』
実業の将帥への期待（34歳、1913年）

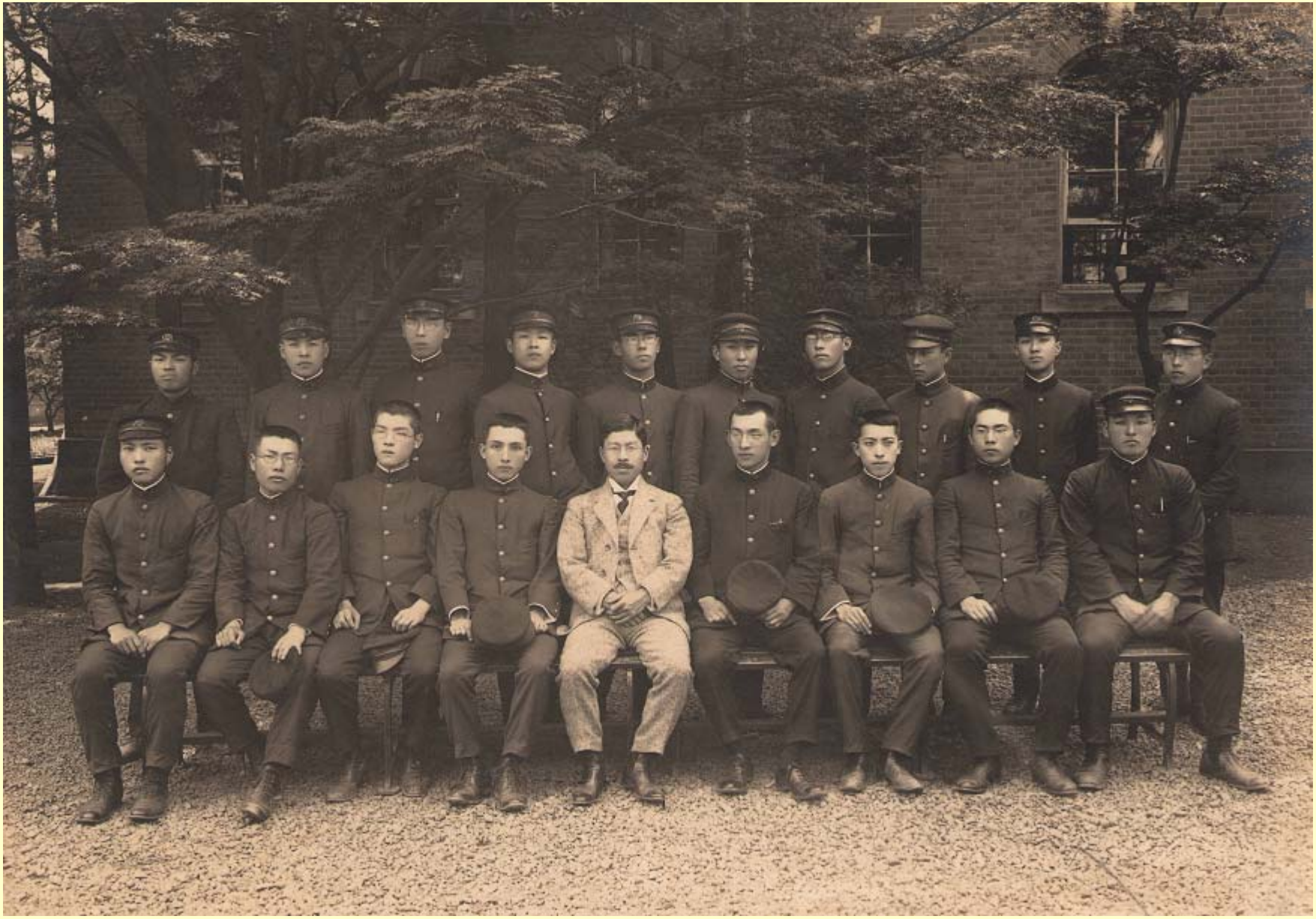
- 第一回留学（1905～1909年）。商事経営学研究のため、バーミンガム大学でBusiness Policyを講じていた経済史家アシュレーのもとへ。

- 「三浦新七君と四年ぶりで会い、非常に愉快なりし。談論の際、同君の説が理論的かつ書物的なるに対し、余の考えが実行的かつ旅行的なるを悟れり。同君の洋行の方針は真の留学なり。余のは見物的なり。」
（『上田貞次郎日記』1907年）

William Ashley (1860-1927)

三浦新七とともに（1936年、国立）

新帰朝のころ（1909年＝30歳）



ゼミナリステンとともに（1913年＝34歳）

『株式会社経済論』
実業の将帥への期待（34歳、1913年）

- 「一方においては事業に接しその事業の衝に当たる人、一方においては事業がまるきりわからない、ただただ金を出す人、この両方の者が相対して株式会社というものを組織している。〔経営者は〕悪いことをしようと思えばいくらでもできるのである。自分の親類、旧主人、友人に対する個人的道徳と全く違うところの道徳、世の中の公衆に対する道徳に基礎をもたなければならぬ。これなければ株式会社というものは到底うまくいかない。」（「株式会社の倫理」1912年）

『株式会社経済論』
実業の将帥への期待（34歳、1913年）

- 「日本の歴史においてこの株式会社の起源進歩はどうかというと、日本では士族がやったのである。従来の商人は、商売上の道にかけては士族よりもえらい。しかしながら、人の金を預かって正直に注意して取り扱うということは、今までの普通の商売人は知らなかった。士族はどうかというと、これは較々似寄ったことを昔からやっていた。つまり役人としての経験である。株式会社の当局者と政府の役人のあいだに、道義上似寄った基礎があるのであります。」(「株式会社の倫理」1912年)

『株式会社経済論』
実業の将帥への期待（34歳、1913年）

- 「今日の実業家は、もはや昔の町人とは違って一個の私人ではない。天下の公人である。この人の進退如何によって幾百千万人の運命が定まり、日本の国運が決せられるのである。これすなわち今の社会的大変動の時代にあたりて、私が特に実業家の社会的責任を問わんとする所以である。」
（「実業家の社会的責任」1921年）

Captain of Industry

- 「産業の指揮者は、じつは世界の将帥なり。混乱と欠乏と悪弊とに対する闘士として、偉大なる世界的福祉を人の世にもたらすべき者は彼らなり。汝、実業の将帥よ、拝金の夢より醒めて英国を救え。しからずんば亡びよ。」
（カーライル『過去と現在』。上田貞次郎「カーライル及ミルの産業論」1922年の訳文による）

Captain of Industry

- 「実業の将帥よ、汝の周囲を見よ。社会は乱れたり、荒みたり、まさに爆発狂乱の際にあり。人はもはや、一日六ペンスの賃金と需要供給の法則のみによって汝のために働かざるべし。汝は貴き指導によりてのみ、人をして貴き忠義心を起こさしむるを得ん。」
（カーライル『過去と現在』。上田貞次郎「カーライル及ミルの産業論」1922年の訳文による）

Captain of Industry

- 「汝の千両箱を数うるをやめよ。しかして汝の心中に生くる貴きものを滅びしむるなかれ。もし汝が千両箱を数うるをやめずんば、その金こそは長く汝の手にのこることなからん。」
（カーライル『過去と現在』。上田貞次郎「カーライル及ミルの産業論」1922年の訳文による）

上田貞次郎のゼミ教育

- 上田ゼミの代表的卒業生…

茂木啓三郎(1899～1993、キッコーマン)
正田英三郎(1903～1999、日清製粉)
森泰吉郎(1904～1993、森ビル)
小坂善太郎(1912～2000、外務大臣)

上田貞次郎のゼミ教育

- 「先生の教訓として、私が特に肝に銘じていることがある。それは、《君、世の中へ出てみると、男一匹どうしていいかわからないという難問にぶつかることがあるよ。その時は、決してバタバタあわててはいけない。腰をじっと据えて、目を輝かして周囲を見ているのだ。そうすると必ず何かの動きがある。それを捉えて疾風迅雷、事を処理するのだ。》と教えられたことである。」(茂木啓三郎、1982年)

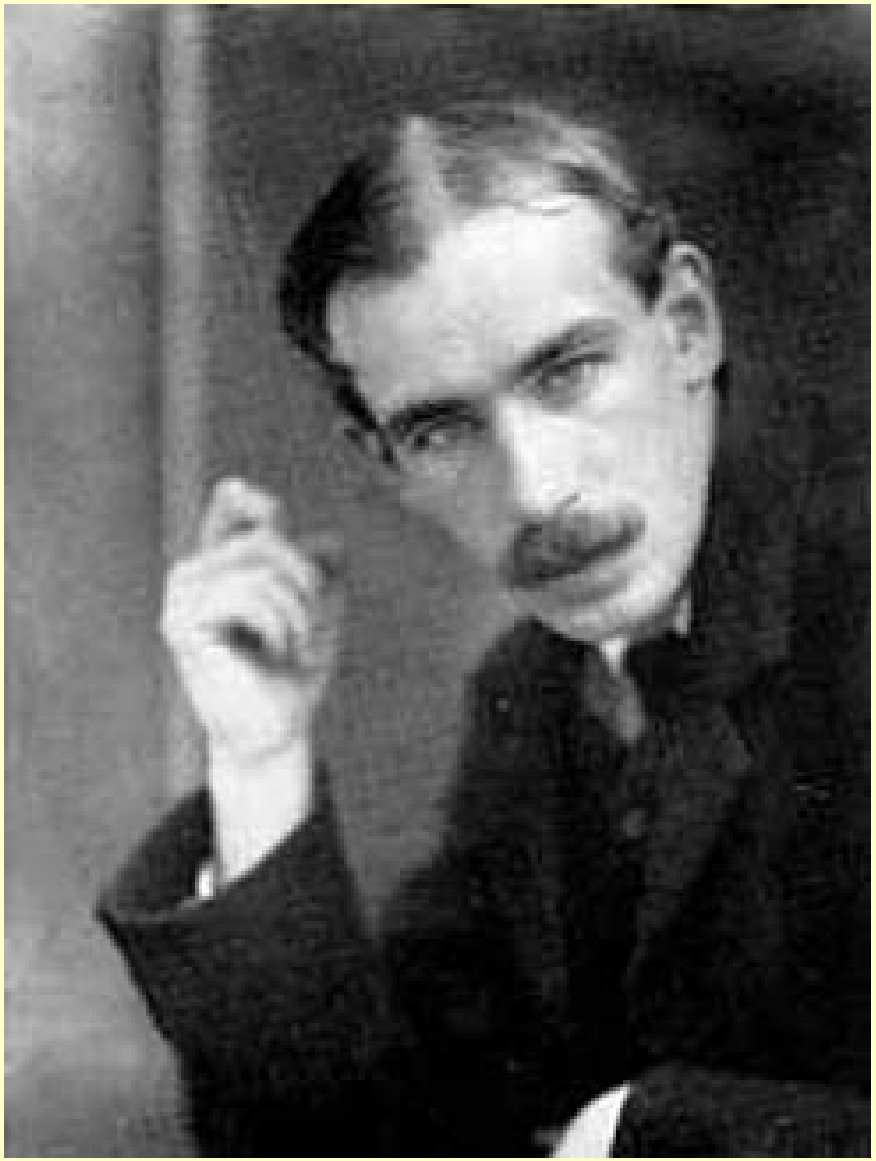
『英国産業革命史論』
産業民主化の可能性（44歳、1923年）

- 第二回留学（1913～1914年）。徳川頼貞（音楽学）の教育係として、ケンブリッジのキングズ・カレッジへ。狭い専門を離れて政治思想史を研究。ウェッブ夫妻、ディキンソン、ケインズと交流。

- 第一回国際労働会議（1919年）。紀州出身の政府代表・鎌田栄吉の顧問として出席。国際労働条約の批准を求めて運動。

徳川頼貞、上田貞次郎、鎌田栄吉、小泉信三（1913年）

Goldsworthy Lowes Dickinson (1862-1932)



John Maynard Keynes (1883-1946)

三三会（1920年頃、中央は貞次郎、左に前田卯之助）

第一回国際労働会議（1919年＝40歳、ワシントンにて）

学科編成会議（1920年、三浦新七、佐野善作、堀光亀、貞次郎）

『英国産業革命史論』
産業民主化の可能性（44歳、1923年）

- 「1918年11月、欧州大戦争の終了してから数か月の間にわが日本の思想界が非常の変動をなしたことは、いかに健忘性な人でもよもや忘れはしまい。」

- 「1920年の春、余はワシントンにおける第一回国際労働会議から帰って以来、右のごとき思想界の紛糾を眼前に見て深く考慮したが、ついに英国の産業革命、およびこれに次いで起これる新実業階級および新労働階級の歴史を、かつ研究しかつ講義することを始めた。」

『英国産業革命史論』
産業民主化の可能性（44歳、1923年）

- 「産業革命の真の意義は産業の合理的経営であって、それがいわゆる資本主義的大企業の発達となり、またその結果として資本的企業者と労働者との二階級があい対抗することとなり、現代の難局を醸成したのである。」

『英国産業革命史論』
産業民主化の可能性（44歳、1923年）

- 「ミルの楽観したところの生産組合は失敗に帰して、企業の指揮はますます独裁的に傾きつつある。19世紀は政治上のデモクラシーを完成したけれども、産業上には企業の規模が増大しただけ、多数の人が一人または数人の指揮者の下に服従しなければならなくなった。しかしながらいわゆる産業の将帥は、カーライルの描いたような徹底的温情主義を取らずして、ますます営利主義の完成に走っていった。」

『英国産業革命史論』
産業民主化の可能性（44歳、1923年）

- 「第一に、生産事業の経営は、カーライルのいえるごとく一の大なる組織であって、その指揮監督は有為なる人材の力にまたねばならぬ。資本は死物であるけれども企業は活物であるから、産業の社会化されるためには、資本の問題とともに人物の問題を解決せねばならぬ。」

『英国産業革命史論』
産業民主化の可能性（44歳、1923年）

- 「第二に、産業の社会化は、ミルの理想としたような労働者のデモクラシーによらなければとうてい完成することのできないものであるが、そのデモクラシーなるものの運用は、政治上においても産業上においても、今はなおすこぶる幼稚の域を脱しておらぬ。デモクラシーが社会組織の原則となるためには、煽動および雷同の気分を脱して真の自治協同に至らねばならぬ。」

ゼミナリステンとともに（1925年＝46歳、箱根）

前田卯之助邸にて（1926年＝47歳）

『新自由主義』
後発国の進むべき道（48歳、1927年）

- 普通選挙法（成立=1925年、実施=1928年）。
- 雑誌『企業と社会』刊行（1926～1928年）。

- 「無産党以外にあって、しかも保守党に入る能わざる分子が多数に残るであろう。これらの人々が一定の思想体系に基づいたところの主義政策を立てうるならば、それは必ず日本の将来に大なる勢力となり、また国運の進展に貢献しうることを私は確信するのである。しかしてその思想体系は、新自由主義でなければならぬと思う。」

『新自由主義』
後発国の進むべき道（48歳、1927年）

- 後発効果（ガーシェンクロン、1962年）。
- 開発主義（村上泰亮、1992年）。

- 「現代日本の欠点は、明治維新以来の伝統たる国権的保護干渉主義である。この欠点を排除するものは、同様に集権的なる社会主義でもいけず、またこれをいくぶん緩和したところの社会政策主義でもいけない。個人の自由と個人の責任に重心を置くところの思想が起こらなければ時弊を救うことはできぬ。」

『新自由主義』
後発国の進むべき道（48歳、1927年）

- 「新自由主義は、旧自由主義のごとく単純なる個人の自由、すなわち個人が他の個人または政府の干渉を免れるということだけを理想としてはならぬ。それは、わが国民の一人ひとりをして天分を充分に発育し得しむるの自由でなければならぬ。けれどもわが国の現状にては、かつて国民経済の隆興を促すために取られたる資本主義扶殖策がその目的を達したる後においてもなおその余弊を残しているから、まずこれを一掃して資本主義そのものを自主的ならしめなければならぬのである。」

『新自由主義』
後発国の進むべき道（48歳、1927年）

- 「旧自由主義は個人の自主独立を可能ならしむるところの基礎条件として教育機関の完成を主張したことは顕著なる事実であるが、吾人はそれと同じ精神をもって労働者の職業上および職業外の衛生および保健に関する施設を整えなければならぬ。また、生活安定の基礎を作らなければならぬ。いずれにしても、労働者の一人ひとりがその施設経営の趣意を理解して、その目的の達成に協力することを必要とする。《依らしむべし、知らしむべからず》の方針にもとづいた社会政策は、むしろなきにしかない。」

『新自由主義』
後発国の進むべき道（48歳、1927年）

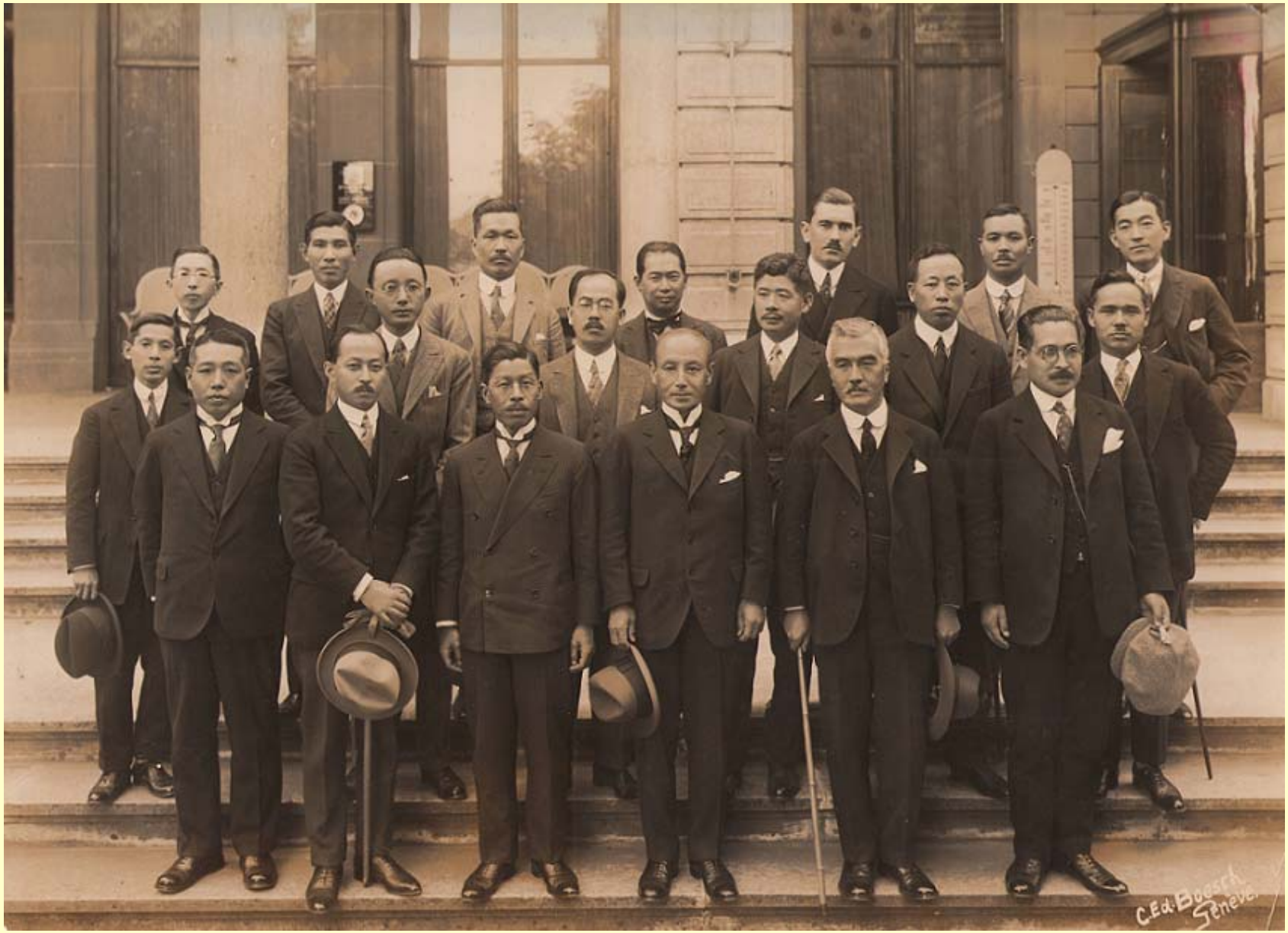
- 通商政策：産業保護よりも関税引き下げを実行せよ。
- 社会政策：産業国営よりも進歩的税制改革を進めよ。
- 労働政策：組合は政治運動よりも団体交渉に徹せよ。
- 農業政策：農村保護よりも農業経営効率化をはかれ。
- 教育政策：高等教育よりも義務教育完成を優先せよ。

『新自由主義』
後発国の進むべき道（48歳、1927年）

- 「博士の提説は必ずしも理論上社会主義的改造論を排斥するものではないらしく、日本当面の問題として、自由主義的訓練の機会を国民に提供すべしとの論と観られぬこともない。いずれにしても、日本独特の国状を背景として社会主義的改造観がその実際政策の綱目中にまずもって何を顧慮すべきか、を暗示せる論文として、上田博士のこの説は敵も味方も大いに味わうべき必要あるを思うのである。」（吉野作造の批評。『中央公論』巻頭言、1926年）

『新自由主義』
後発国の進むべき道（48歳、1927年）

- 「新日本同盟」（1925年結成、近衛文麿・田沢義鋪ら）の政策として取り入れられた。
- ジュネーブ国際経済会議（1927年）の後、「自由通商協会」（志立鉄次郎・平生釟三郎らとともに）を設立して運動。



ジュネーブ国際経済会議（1927年＝48歳）

前田卯之助父娘と貞次郎夫妻（1928年、ウィーンにて）

前田卯之助父娘と貞次郎夫妻（1928年、ウィーンにて）

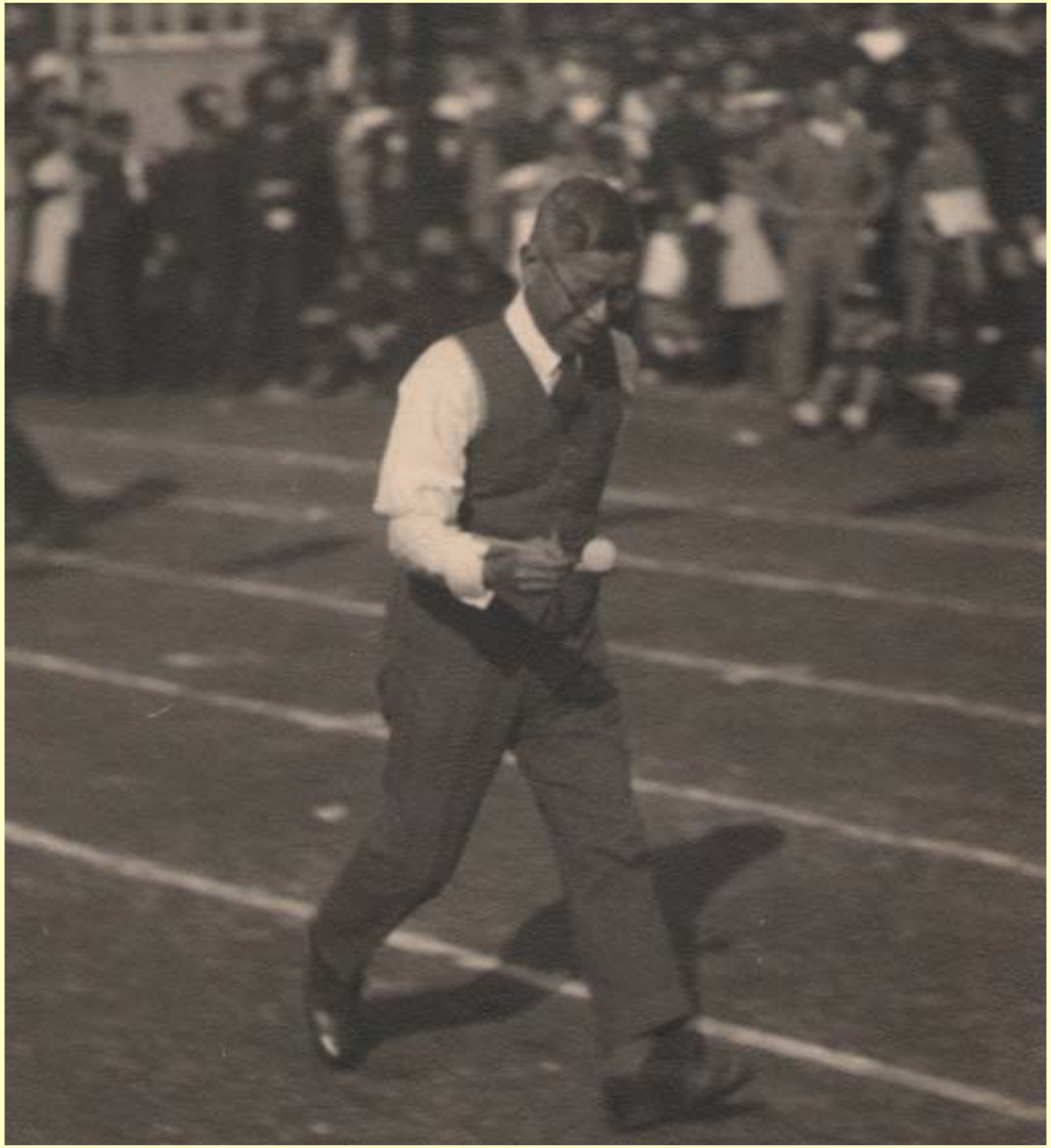
家族（信三、勇五、良二、てい、正一）とともに（1934年）

貞次郎夫妻の遺品（三味線のバチ）

貞次郎夫妻の遺品（長唄の楽譜）

ゼミナリステンとともに（1936年＝57歳）

ゼミナリステンとともに（1936年＝57歳）



運動会にて（1936年＝57歳）

ゼミナール遠足で高尾山へ（1938年＝59歳）

『日本人口政策』
自由社会の存立条件（58歳、1937年）

- 「国民が軍国主義に引きずられていくのを見ているのが不愉快でたまらない。いつか機会を見て公然、反軍国主義を唱えてみたいなど考えた。」（『上田貞次郎日記』1932年、満州事変について）

- 「余は満州事件の突発以来、日本の人口問題に興味を深くもち出したから、これを中心問題と定めた。」（『上田貞次郎日記』1932年、日本経済研究会について）

『日本人口政策』
自由社会の存立条件（58歳、1937年）

- 「日本経済研究会」（背広ゼミナール、1930～1938年）…猪谷善一、山中篤太郎、美濃口時次郎、井口東輔、池野勇治、左右田武夫、小倉正平、中山伊知郎、東畑精一、吉田秀夫、森田優三、杉本栄一、小田橋貞寿、猪間驥一。人口問題研究と小工業研究に取り組む。

- 「ある夜、集まりに出てこられた先生は、嬉しさにはちきれそうな顔をして言われた。――《日本の人口の将来の数を予測する方法を思いついてね、嬉しくて嬉しくて仕方がない。早くその計算がしてもらいたいのだ。》」（猪間驥一）

『日本人口政策』
自由社会の存立条件（58歳、1937年）

- ① 現在の人口中どれだけが生き残るかについては、大正14年の5歳別人口が5年後の昭和5年に一段階上の5歳別人口となった率、すなわち「5歳別生残率」が将来も続くものと仮定する。

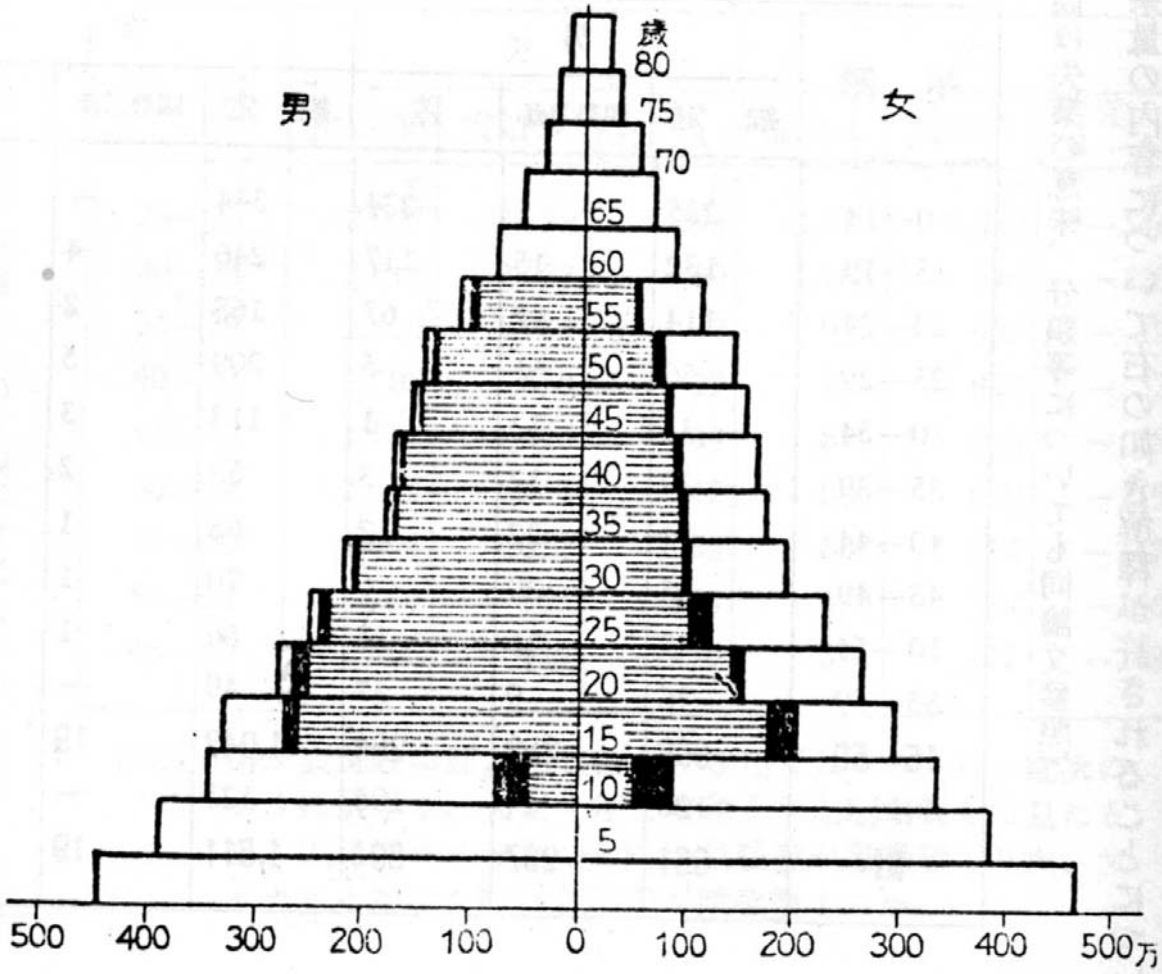
- ② 今後生まれる人口は毎年210万と仮定する。これは過去12年間の数字に基づいている。この間、親世代の人口は増加しているが、出生率低下のため出生数は増えていないからである。

『日本人口政策』
自由社会の存立条件（58歳、1937年）

- 「日々の新聞紙上に活躍するところの愛国者や政治家や将軍らも、日本の運命を形づくりつつある一大経済力に比較すれば、あやつり人形のごとく小さいものであろう。来たるべき10年間に日本が養いかつ職を与えなければならぬ人口は、現在よりも1000万人だけ増加するのである。」（上田貞次郎の人口推計を紹介したロンドン・タイムズの記事、1933年）

- 「この小島国に激増する人口を維持する途は、国際貿易の発達による国民経済の工業化を促進するのほかにはない。アウタルキーは断じて日本を生かす所以でない。」

第 6 圖　昭和5年の要職業人口と實際就業人口



(註)　(1) 外廓は昭和 5 年人口の年齢別構成、(2) 横線は昭和 5 年の實際就業人口、(3) 横線に黑線を加へたるものは昭和5年の人口が大正9年の就業率を以つて就業せりと假定せる場合の就業人口(要職業人口)、(4) 從つて黑塗は推定失業者數、(5) 60歳以上の就業人口は省略した。

３．研究の軌跡
―日本経済の歩みとともに―

- 『外国貿易原論』（自由主義）
  ⇒講義「商業政策」（＝国際経済学）

- 『株式会社経済論』（保守主義）
  ⇒講義「商工経営」（＝経営学）

- 第一次大戦→『英国産業革命史論』（社会主義）
- 普通選挙→『新自由主義』（自由主義）
- 満州事変→『日本人口政策』（自由主義）

４．上田貞次郎の遺したもの
―70年の後に―

- 見えるもの（住居、山荘、胸像）
- 見えないもの（人物と学問に対する評価）

門下生献呈の住居（1931年建設、中野区中野に現存）

中野の自宅書斎にて

雷鳥（中川孫一氏旧蔵の貞次郎の遺品）

中野の自宅居間にて

夜雨荘（1925年建設、軽井沢千ヶ滝に現存）

夜雨荘にて（1938年）

夜雨荘（1925年建設、軽井沢千ヶ滝に現存）

在校生が建てた胸像（1940年建立、国立キャンパスに現存）

人物に対する評価

- 「終戦後、日本の政治家が一頃しきりに学界に人を求めたことがあり、私もあるとき説をきかれた。私はそれに答えて、学界に人はいない、ただもし上田が生きていたら、推したかも知れない、といったことがある。それは私の偽らぬ所見であった。」(小泉信三)

学問に対する評価

- 「上田の著書は、この時代の日本経済に関する最良の学識の一端を示すものである。上田のきわめて社会科学的な方法は、戦前期の日本経済に関する研究の重要な特徴の一つを明らかにしている。つまり、日本がまだ全くの開発途上国であった時代、しかも国家主義と愛国主義がいよいよ声高に叫ばれるようになった時代にあっても、何人かの日本の学者たちは、他の国の社会科学における最良の学識にひけをとらない洗練と客観性をもって、この分野における調査と分析をなしとげることができたのである。」Janet Hunter（Teijiro Uyeda et al., 2000 (1938) , *The Small Industries of Japan* 序文より）

学問に対する評価

- 「*The Small Industries of Japan*は、戦間期日本の産業に関心をもつ全ての人にとって情報の宝庫であるが、その価値はそれに留まらない。本書は多様な組織、多様な規模の事業や生産のあり方を含む製造業部門を描いている。そこで労働は、家族成員によって供給されたり、工場の賃金労働者や下請業者によって供給されたりする。技術水準は単純なものから高度に洗練されたものまである。本書の内容は、現代の読者にとって重要な示唆を含んでいる。」

  Janet Hunter（Teijiro Uyeda et al., 2000 (1938) , *The Small Industries of Japan* 序文より）

学問に対する評価

- 「第一に、本書で描かれた範囲に限っても《二重構造》という用語が製造業の組織形態の全体像を捉えていないことである。第二に、上田の研究は、すでに1930年代の小規模供給者の存続にとっても柔軟性が重要な要因だったことを示している。最後に、ふつうは戦後の製造業のものと考えられている下請や専門メーカーからの部品供給といったいくつかの特徴が原型的にせよ見られたことは、《1940年体制》を戦後日本の発展の重要な分水嶺として強調する見方が有効でない場合もあることを示唆している。」

  Janet Hunter（Teijiro Uyeda et al., 2000 (1938) , *The Small Industries of Japan* 序文より）

上田貞次郎の方法

- 「学者は実際を知らず、実際家は学問を知らず、政治は産業を離れ、産業は社会にそむく、これじつに産業革命の波涛に漂える現代日本の悩みではないか。吾人はこの混沌裡にあって、企業より社会を望み、社会より企業を覗い、眼前の細事に捉われずまた空想の影を逐わず、大所高所より滔々たる時勢の潮流を凝視して、世界における新日本建設の原理を探らんとする。吾人のにくむところは虚偽と雷同とであり、吾人の戒むるところは煩瑣と冗長とである。吾人が訴うるところの読者は純真にしてかつ聡明なる満天下の青年識者である。」雑誌『企業と社会』宣言